

アジア研究教育ユニット（特別経費）平成 30 年度教育研究報告書

事業課題名	アジア・イスラーム型共生文明の構築をめぐるワークショップのための教員招聘
代表者名	小杉泰（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）
事業概要 (600 字程度)	<p>本事業は、アジア・イスラーム型平和共生文明をめぐる問題群に関する研究国際シンポジウムを京都大学にて開催するものである。大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（以下、ASAFAS）グローバル地域研究専攻には、平和共生・生存基盤論講座があり、これまで専攻全体で非ヨーロッパ型の文明パラダイムのあり方を探究してきた。一方、本事業によって教員を招聘するマレーシア国民大学イスラーム文明研究所（以下、IIH）は、アジア・イスラーム型文明論に関する域内随一の研究拠点である。本事業での国際シンポジウムの開催によって、アジアから提起する共生文明パラダイムの普遍的可能性を協働で探究するとともに、その新たなパラダイムが人類の直面する諸課題にどのように貢献しうるかについて方向性を示すことが期待される（「国際的学際的協働による世界最高峰のアジア研究拠点の形成（ミッション 1）」への貢献）。また、本事業による国際会議は、昨年度、京都大学とマレーシア国民大学の間で大学間学術交流協定を締結した後に行われる最初の大規模な共同プロジェクトである（「相互理解と問題解決のための現代アジア研究の国際共通基盤構築（ミッション 3）」への貢献）。なお、今回の国際シンポジウムでは、両大学に所属する大学院生もポスター発表を行う。これは、海外の第一線の研究者と研究交流を行う機会を与えると同時に、自らの研究成果の国際発信を行うための訓練の場を提供することを目的としたものである。この取り組みは、「国際連携大学院プログラムによるグローバル人材育成（ミッション 2）」の一端を担うものである。</p>

成果の概要
(800 字程度)

本事業による国際シンポジウムは、2018年12月10日から11日まで2日間にわたって開催された。会議には、本事業経費によって招聘した9名の教員に加えて、他経費によって11名、計20名の研究者がマレーシア国民大学より来日し、研究報告を行った。また、京都大学からは、10名の教員、ポスドク、大学院生が研究報告を行った。

2日間のシンポジウムでは、急増するアジアやイスラーム世界の人口およびそれらの地域の急速な経済発展を背景として、これらの地域の人々のより良き生と自然環境を持続的に維持するための現地対応型の文明システムのあり方が議論された。本シンポジウムは、欧米とは異なるアジア型の文明システムのあり方を希求してきた日本と、イスラーム世界の中で次世代文明のあり方を最も活発に議論してきたマレーシアの間での対話という独自の枠組みによって開催をしてきたが、2日間の議論を通して、アジア文明とイスラーム文明の両者の長所や潜在力を相互に活用しあう「アジア・イスラーム文明」の方向性を可視化・共有することができた。

今後の展開としては、両大学を核として、本シンポジウムの趣旨（アジア・イスラーム文明論）に賛同する他の大学、研究機関にも参画を呼びかけ、新しい文明パラダイムの実現と実践をめざしていくことが議論された。特に、今回の国際シンポジウムの共催の1つであるハダリー・グローバル・ネットワークは、本国際シンポジウムの趣旨に沿った国際共同研究を行うための国際プラットフォームとして2017年に創設された。今後は、このプラットフォームを活用しながら、日本、マレーシアだけでなくイスラーム世界、欧米の大学、研究機関との間でアジア・イスラーム文明論に関する国際共同研究を推進していく予定である。

なお、本事業の教育効果として、国際シンポジウムに参加した本学の大学院生が来日した教員・研究者と非常に積極的に研究交流を行っている光景が至る所で見られたのは特筆に値する。次世代の学術研究を担う大学院生に対して、今後もこのような機会を継続的に提供していくことの重要さとその効果の大きさを痛感させられた会議でもあった。